

第二章 末摘花の物語 光る源氏帰京後

[第一段 顧みられない末摘花]

さるほどに(姫宮の暮らしが其の様に困窮していた所に)、げに世の中に赦されたまひて(いよいよ光君が朝廷に赦免されなさって)、都に帰りたまふと(都にお帰りなされると)、天の下の(あめのしたの、国中が)喜びにて立ち騒ぐ(喜びで沸き返ります)。我もいかで、人より先に(我こそは何とか人より先に)、深き心ざしを御覧ぜられむとのみ(深い忠誠心を光君にお認め頂きたいとのみ)、思ひ*きほふ男、女につけて(気負って競い合っている男や女を見るにつけて)、高きをも下れるをも(身分の高い者にも低い者にも)、人の心ばへを見たまふに(その欲得がらみの心情を御思いになって)、あはれに思し知ること(光君は改めて世の無常に感じ入ること)、さまざまなり(実に多くの生々しい実態を目の当たりに為さいました)。 *「きほふ」は<競う>。

かやうに、あわたたしきほどに(このような慌しい復帰直後の情況に)、さらに思ひ出でたまふけしき見えで月日経ぬ(光君は姫宮を全く思い出しなざる様子も無く月日が過ぎました)。

「今は限りなりけり(最早是までか)。年ごろ(この数年)、あらぬさまなる御さまを(以前とは打って変わった殿の御不遇を)、悲しういみじきことを思ひながらも(悲しく無念なことと思ひながらも)、*萌え出づる春に逢ひたまはなむと念じわたりつれど(殿が命の吹き返す春を迎え為さいますようにと祈り続けてきたが)、*たびしかはらなどまで喜び思ふなる(河原小石のような下っ端などまで浮かれ気分になるような)、御位改まり(おんくらゐあらたまり、政権交代)などするを(などがあるのを)、よそにのみ聞くべきなりけり(他人事として聞くしかないとは)。 *注に<「岩そそくたるひの上の早蕨の萌え出づる春になりけるかな」(古今六帖、一月、志貴皇子)を踏まえる。 >とある。Web サイト「やまとうた」の志貴皇子(しきのみこ)のページによると、この歌は万葉集 8 巻 1418 番の歌として<志貴皇子の權(よろこび)の御歌一首(みうたひとつ)>と題詞されて、「石激る(いはばしる)垂水の上の(たるみのうへの)早蕨の(さわらびの)萌え出づる春に(もえいづるはるに)なりけるかな」と記されている。歌と読み手については同ページに親切に解説されているが、歌意は<水の激流と岩の固さとに抗して芽吹く緑とのそれら全ての生命力に共感する>と言う事で良さそうだ。 *「たびしかはら」は<瓦礫のように多くの取るに足らないもの>という意味らしい。「たびし」は<飛礫(つぶて)>で「かはら」は<瓦>だと古語辞典に説明されていた。でも私には、「瓦礫」からは複雑な屈折感を覚えてしまう。だったら、「たびし」は<手粒(つぶて)>で「かはら」は<河原>だとした方が、<河原の小石>其の儘に生来の小者らしい気がする。

悲しかりし折の*憂れはしきは(御無沙汰に悲しんだ時に心労した事は)、ただ*わが身一つのためになれるとおぼえし(ただ自分一人が勝手にしてただけだと思えてしまう)、かひなき世かな(遣る瀬無い縁なんだわ)」と、心くだけで(心が折れて)、つらく悲しければ、人知れず音を(ねを、声を上げて)のみ泣きたまふ(御泣きになるばかりです)。 *「憂れはし(うれはし)」は<心配すべき状態にいる>という形容詞と古語辞典にある。その名詞の「うれはしき」は<心配すべき状態であったこと=心労した事>。 *「わが身一つのためになれる」については、注に<「世の中は昔よりやは憂かりけむ、わが身一つのためになれるか」(古今集雑下、九四八、読人しらず)の言葉によったもの。 >とある。歌意は<世の中は元々それ自身が辛いものなのか、それとも自分がそう思っているだけなのか>だろうか。

大弐の北の方(大弐の奥方である叔母上は)、「さればよ(だからさ)。まさに(なんで)、かくたづきなく(こう遣り繰りの手立てのない)、人悪ろき御ありさまを(見窄らしい御様子の姫君を)、*数まへたまふ人はありなむや(本気で相手になさろうなんていう人が居るもんですか)。 *「数まふ」は<数える、数え上げる>で、<物の数に入れる>から<人並みに扱う>までを含意する。

*仏、聖も(ほとけひじりも、仏様や聖人だって)、罪軽きをこそ(難点が少なくこそ)導きよくしたまふなれ(道を御示し易いってなもんですよ)、 *「ほとけひじり」が光君だとして導かれるのが姫と考えると、仏聖が光君を導くとも、叔母上が姫を<罪重し>と見ている事に変わりはない。なお此処は意味よりも、道理を説くような口調で厭味を言いたかった叔母上の受領のカミサンらしい蓮っ葉さの演出だろう。

かかる御ありさまにて(あの無残な御有様で)、たけく世を思し(高尚ぶって)、宮(みや、常陸宮や)、上(うへ、宮妃)などのおはせし時のままに(などの御存命中の時と同じ様に)ならひたまへる(振舞いなさる)、御心おごりの(御慢心の)、*いとほしきこと(何と意地らしいこと)」と、いとどをこがましげに思ひて(ますます姫を愚かしく思っ)、 *この「いとほし」は逐語のままに皮肉いっばいの言い方と考えたが、元々「いとほし」は含みのある言葉だろうから、「いとほしきこと」を<実に呆れたものなこと>と言い換えるのも有りかも知れない。

「なほ(ぜひ)、思ほし立ちね(決心なさいませ)。*世の憂き時は(世の中が辛い時は)、見えぬ山路をこそは(世間を離れた山深い道こそを)尋ぬなれ(訪れたら良い、と古歌にも言って在るでは有りませんか)。 *この叔母の語り口については、注に<「み吉野の山のあなたに宿もがな世の憂き時の隠れ家にせむ」(古今集雑下、九五〇、読人しらず)「世の憂き目見えぬ山路へ入らむには思ふ人こそほだしなりけれ」(古今集雑下、九五五、物部吉名)を踏まえた表現。古歌の文句を引用して説得する。>とある。なるほど、意味を拾って言い換えても叔母上の洒落心までは表せない。仕方が無いので、付け足し文を補足してしまった。引歌についてはWebサイト「ミロール倶楽部」の古今集の解説ページを参照したが、二つ目の引歌が「同じ文字なきうた」の詞書にある通りに、物名歌の流れの隠し題による言葉遊びになっている、という説明は興味深い。叔母上の浮かれ気分が伝わる気がする。

田舎などは、むつかしきものと(気が進まぬものと)思しやるらめど(御思いになるでしょうが)、ひたぶるに人悪ろげには(都より見劣りする暮らしなど)、よも(決して)、もてなしきこえじ(為せたり致しません)」など、いと言よく言へば(とても言葉巧みに言えば)、むげに屈んじにたる女ばら(すっかり貧しさに根負けした女房たちも)、

「さもなびきたまはなむ(そう為されれば良いのに)。たけきこともあるまじき御身を(見栄を張っても居られないご事情だと言うのに)、いかに思して(どういうお考えで)、かく立てたる御心ならむ(こうも頑固で御出でなのだろう)」と、もどきつぶやく(非難をつぶやきます)。

侍従も、かの大弐の甥だつ人(大弐となった主人の甥に当たる人と)、語らひつきて(情交を交わして)、とどむべくもあらざりければ(京に留まる筈も無かったので)、心よりほかに出で立ちて(望まぬながらも筑紫へ旅立つ事になって)、

「見たてまつり置かむが(お世話申し切れませんが)、いと心苦しきを(とても申し訳ないので)」とて、そそのかしきこゆれど(御同行を御勧め申し上げたが)、なほ(姫は尚も)、かくかけ離れて久しうなりたまひぬる人に(このように途絶えて久しく御なりの光君に)頼みをかけたまふ(援助を期待申しなさいます)。

御心のうちに(姫は御内心で)、「さりとも(未だに御手紙が無いとは言え)、あり経ても(どんなに時が経っても、いつの日にかは)、思し出づるついであらじやは(私を思い出しなざる時が来ない事があるか)。*あはれに心深き契りをしたまひしに(あんなに優しく御抱きになったばかりに)、わが身は憂くて(この身が辛くなったのだから)、かく忘られたるにこそあれ(今はこのように忘れられたようでこそあっても)、風のつてにても(風の便りにでも)、我かくいみじきありさまを(私がこのように惨めでいる有様を)聞きつけたまはば(御聞き付けになれば)、かならず訪らひ出でたまひてむ(必ず訪ねて来て下さるだろう)」 *此処の文に私は大注目した。この良い女風の台詞を、どの面下げて常陸宮の姫君が言っているのかと思えば、可笑しいとか、重いとか、哀れだとか言う事よりも、やはり光君はよほど床上手だったか、絶倫だったのか、この姫をしてしっかり女の気持ちを味合わせたらしいことに妙に感心する。この文を一読した時に私は、「あはれに心深き契りを(あんなに熱い男根を)したまひしに(私の中に挿し込みなされたものだから)吾身は憂くて(こんなに女陰がうずいて)」と読んで少し興奮した。しかし、モテない者は一寸した触れ合いに自分の全人生を掛けると言う事も良く有りそうに思えて、すぐ身分制度上の意味を考えてみようとして、冷めた。すると案の定に続く文で、持てる者(色恋よりは権力や財力)が持てざる者に施すのは当然だと言う、身分制度を前提にした同族同士の契約認識が丸々展開されているではないか。しかし、それでもやはり此処の文からは女を感じる。というのも、理屈の上では一度失脚した光君に契約履行を迫っても無効で、姫の立場では再契約を願うしかない全くの素女を自覚せざるを得ない、という切実さがあるからだろう。

と、年ごろ思しければ(この数年来御思いになってきたからこそ)、おほかたの御家居も(全体の屋敷の状態は)、ありしよりけにあさましけれど(以前よりは相当荒廃していたが)、*わが心もて(王族意識の一心で)、はかなき御調度どもなども取り失はせたまはず(大した程でもない御道具類なども女房たちに換金処分などを御させにならず)、心強く*同じさまにて念じ(辛抱強く光君の同族意識を信じて)過ごしたまふなりけり(過ごして居らしたのです)。 *此処の「同じさま」を<以前と同様の内装で光君を迎えたい>と読むのは無理だろう。垣根も失せ、渡殿も崩れたままの屋敷に、寝殿の内装だけを保持しても、とても殿を迎え入れる体裁は取れない。これは姫が光君の<同族意識>を念じて、援助を期待したに違いない。

音泣きがちに(声を上げて泣きがちに)、いとど思し沈みたるは(ますます思い沈んで暮らす姫君の)、ただ*山人の(まるで天狗が)赤き木の実一つを顔に放たぬと見えたまふ(赤い木の実を鼻に付けたように見える)、御側目などは(おんそばめなどは、横顔などは)、*おぼろけの人の見たてまつりゆるすべきにもあらずかし(普通の人顔と思っては拝見できないほどでした)。*「山人(やまびと)」は<仙人>とあるが、此処の描写なら<天狗>か<山猿>あたりを思う。 *「おぼろけ」は「朧気」と紛らわしいが、<普通らしい様子>という意味らしく、その意味から逆推するなら「おほかた・らし・け」の音便だろうか。とまれ、多くは(下に「ならず」などの打ち消しの語を伴って)〈なみひととおりの〜というさまではない〉の形で使う、ようだ。

詳しくは聞こえじ(詳しくは申せません)。いとほしう(いや如何にも)、もの言ひ(語り手のものの言い方が)さがなきやうなり(悪いかのようになりますから)。

[第二段 法華御八講]

*冬になりゆくままに、いとど(ますます)、かき付かむかたなく(すがり付きたい思いは適わず)、悲しげに眺め過ぎしたまふ(姫は悲しげに物思いに沈んでお過ごしになります)。*朱雀帝から光君に帰京の宣旨が下りたのは七月二十余日で、光君は八月上旬に明石を発ち、そして中秋の名月八月十五日に復帰後初参内を果たした。「冬になり行く」は十月になる頃だから、帰京後で一ヶ月半、帰京の話が世に広まってからなら二ヶ月半、常陸宮の君は光君から無視され続けている。

かの殿には(大将殿に於かれては)、故院の御料の*御八講(こみんのごれうのみはっかう、故院の御追善の御供養法会を)、世の中ゆすりてしたまふ(世の中挙げて盛大に執り行いなさいます)。*濤標巻に「神無月に(かんなづき、十月に光君は)御八講したまふ(みはっかう、法華經典八巻を朝夕二講座つつ四日間読経する御八講を故院の供養法会として催しなさいます)。」とある。

ことに僧などは、なべてのは召さず(並みの者は御呼びなさらず)、才すぐれ(ざえすぐれ、学問が良く出来る秀才で)行なひにしみ(修行を積んだ)、尊き限りを(高僧だけを)選らせたまひければ(お選びなされたと言う事で)、この禅師の君参りたまへりけり(姫の兄上の禅師の君も御八講に参列なさいました)。帰りざまに立ち寄りたまひて(そして、洛外東南の山科醍醐寺への帰り際に宮邸に立ち寄りなさせて)、

「しかしか(こういう次第で)。権大納言殿の御八講に参りて侍るなり(まゐりてはべるなり、行って参りました)。いとかしこう(大変畏れ多く)、生ける浄土の飾りに劣らず(実現した理想郷然ながらの飾り付けに)、いかめしうおもしろきことどもの限りをなむしたまひつる(厳かで目を見張る読経法の全てを催しなさいました)。仏(ぶつ、御釈迦様か)菩薩(ぼさち、直弟子様)の変化の身にこそ(へんげのみにこそ、化身であるに)ものしたまふめれ(違いあるまい)。*五つの濁り深き世に(この末世に)、などで生まれたまひけむ(どうしてお生まれ為されたか)」と言ひて、やがて出でたまひぬ(すぐに御帰りになりました)。*「五つの濁り」は仏教用語でいう「五濁(ごちよく)」との事。「五濁」とは、劫(こふ)・見(けん)・命(めい)・煩惱(ぼんなう)・衆生(しゅじやう)の穢れ。「劫濁」は天変地異・疫病・戦争などの大災。「見濁」は邪思想。「命濁」は人類の短命化。「煩惱濁」は悪徳。「衆生濁」は努力が報われない因果。末法思想によってこれらは避けられないから、僧は修行して人々を救済しなければならない、というのが仏教の基本姿勢らしい。

*言少なに、世の人に似ぬ御あはひにて(世間とは違う御兄妹同士ですから)、かひなき世の物語をだに(日頃の世間話の一つさえ)え聞こえ合はせたまはず(さっぱり御話し合いなさいません)。*この短い一文が、当時の読者をどれほど落胆させたか、または笑わせたか、について少し考えておいた方が、私自身が楽しめそうだ。何とも頼りにならない兄ではある。妹が権大納言殿のお手付きである事を知らない筈は無い。何も口説口説と光君に言う必要は無い。挨拶がてらに少し印象を与えるだけで、光君に十分圧力を掛けることが出来る立場に居たのではないか。光君にとって御八講は失敗の許されない初仕事である。その重要な式典の演者である高僧の目配せは、その式典の成否に関する勢力の存在を光君に意識させずには置かないのである。突き

詰めて言えば光君に逃げ道はあるものの、事の円滑な推移を図ろうとすれば、姫を厚遇までは行かなくても放置は出来ないものと、光君は思うだろう。しかし兄上は何の働き掛けもしなかった、のである。当時の読者はこの事情を実感しただろう。そして姫は兄にも仏教にも期待はしていなかったが、落胆はした。

「さても(そのような盛大な式典を催されたというのに)、かばかりつたなき身のありさまを(このように頼り無い私の暮らしぶりについては)、あはれにおぼつかなくて過ぎたまふは(少しも気付きなさる事も無くお過ごしとは)、*心憂の仏菩薩や(こころうのぶつぼさちや、がっかりさせる慈悲心だこと)」と、つらうおぼゆるを、「げに、限りなめり(やはり諦め時だろうか)」と、やうやう思ひなりたまふに(ようやく姫が御思いになった時に)、大貳の北の方、にはかに来たり(前触れも無く遣って来ました)。 *「心憂の仏菩薩や」という言い回しに洒落っ気を感じて、私は意外だった。「末摘花」巻に於ける宮姫は、大輔の命婦の目線で語られていた所為か、とにかく引込思案で古風一辺倒の印象だったが、本巻に於いては確かに積極的では無いし流行物に見向きもしないようではあるが、頑固に意志を主張し且つ其の論理は決して古い価値観からではなく、世間知らずでは有っても自分なりの計算高さによるものらしいことが、其の言い回しによって表現されていて、やはり意外である。この姫は、自分の家柄の高さも、その没落ぶりも、自分の不細工さも、かなり冷静に客観視していて、だからこそとても浮かれ気分では暮らせないものの、男が偉そうに捏ね回す仏法の理屈など信じない気の強さで、貧しい暮らしを空虚とも思わない自分の感性に基いた生活態度に徹している。それは父譲りの猜疑心に拠るものかも知れないし、この並外れた貧しさと醜態には嫌悪を覚えながらも、自己の生活感しか信じない当時の多くの女性読者の共感を一方では得ていたような気さえする。

[第三段 叔母、末摘花を誘う]

例は(れいは、いつもは)さしもむつびぬを(それほど親しくしていないのに)、誘ひ立てむの心にて(叔母上は姫を誘い出そうという心算で)、たてまつるべき御装束など調じて(御着せ申そうという衣裳などを用意して)、よき車に乗りて(立派な牛車に乗って)、面もち、けしき、ほこりかにももの思ひなげなるさまして(顔つきや物腰も誇らしげに何の気掛かりも無さそうに)、ゆくりもなく走り来て(断りも無く行き成り来ては)、門開けさするより(門を開けさせる所からして)、人悪ろく寂しきこと(邸のみすぼらしい荒廃ぶりが)、限りもなし(酷いものでした)。

左右の戸もみなよろぼひ倒れにければ(左右の門扉もみな弱って傾いていたので)、男ども助けてとかく開け騒ぐ(従者の男たちが寄って集ってああだこうだと騒ぎながら開けました)。

いづれか(雑草に覆われた庭は行く手を遮りましたが、どこかに)、この寂しき宿にもかならず分けたる跡ある*三つの径と(こんな荒れた家でも必ず通した跡がある筈の三本の道の一つを)、たどる(たどって寝殿に車を向けました)。 *「三つの径(みつのみち)」については、注に<漢蔣* (言+羽)が庭に三逕を作り松・菊・竹を植えたという故事(蒙求)。「三径ハ荒ニ就ケドモ、松菊猶存セリ」(文選、帰去来の辞・陶淵明)の隠遁者の住まいをいう。日本では「門へ行く道、井へ行く道、厠へ行く道」(紫明抄)という説がある。>とある。浮かれ気分の物言いで、つまりは寝殿の階を目指した、ワケだ。

わづかに南面の格子上げたる間に寄せたれば(よせたれば、叔母上が車を寄せたので)、いとどはしたなしと思したれど(ずいぶん厚かましく姫は御思いになったが)、あさましう煤けたる几帳さし出でて(呆れるほどすす汚れた几帳の暖簾を上げて)、侍従出で来たり(侍従が応対に出まし

た)。容貌など、衰へにけり。年ごろいたうつひえたれど(この数年でひどくやつれたが)、なほものきよげによしあるさまして(それでもすっきりと品のある顔立ちで)、かたじけなくとも(畏れ多くも)、取り変へつべく見ゆ(姫と取り替えたいくらいの見映えです)。

「出で立ちなむことを思ひながら(もう出発しなければなりません)、心苦しきありさまの見捨てたてまつりがたきを(お気の毒な様子がお見捨て致し難くて、最後にもう一度お誘い申し上げようと存じまして、)。侍従の迎へになむ参り来たる(侍従の迎え方々参上致しました)。心憂く思し隔てて(貴方が私を嫌って遠ざけ為さり)、御みづからこそ(御自身からでは)あからさまにも渡らせたまはね(ほんの少しでさえ拙宅に御越し頂けませんでしたが)、この人をだに許させたまへとてなむ(この侍従だけでも下向をお許し下さい)。など(それにしても、まあ)かうあはれげなるさまには(こうも御寂しいお暮らしぶりとは)」

とて(と言って叔母上は)、うちも泣くべきぞかし(嘘でも泣いて見せるところでしょうに)。されど、行く道に心をやりて(大宰府現地長官夫人の栄達を思い描いて)、いと心地よげなり(とても御満悦そうでした)。

「故宮おはせしとき(故宮御存命中は)、おのれをば面伏せなりと思し捨てたりしかば(私を一族の恥と御思いになって相手にしてくださらなかったものですから)、疎々しきやうに(うとうとしきやうに、次第に疎遠に)なりそめにしかど(なりだしたのですが)、

年ごろも(この数年来も)、何かは(何しろ、)。やむごとなきさまに思しあがり(姫君は王族を自負なさって)、大将殿などおはしまし通ふ御宿世のほどを(大将殿などが御通いなさる前世からの御縁のほどを)、かたじけなく思ひたまへられしかばなむ(畏れ多く存じられたものですから)、むつびきこえさせむも(親しくして頂こうにも)、憚ること多くて(ご遠慮する事が多くて)、過ぐしはべるを(過ごしてまいりましたが)、

世の中のかく定めもなかりければ(権勢のこの浮き沈みを見ていると)、数ならぬ身は(もの数ではない身分の私どもの暮らしなどは)、なかなか心やすくはべるものなりけり(反って気楽なものと思われるところです)。

及びなく(とても私などには及びもつかないと)見たてまつりし御ありさまの(拝見していた姫君の御様子が)、いと悲しく心苦しきを(とても悲しくお気の毒になってしまったのを)、近きほどはおこたる折も(近くにいる内はご連絡を怠っていても)、のどかに頼もしくなむはべりけるを(呑気に何とでもなると思っていましたが)、かく遥かにまかりなむとすれば(こうして遠くに離れて行こうとすれば)、うしろめたくあはれになむおぼえたまふ(心配で気になってしょうがありません)」

など語らへど(などと話しても)、心解けても(姫は気を許しては)応へたまはず(いらへたまはず、お応えなさらず、)。

「いとうれしきことなれど(大変有難い御話しですが)、世に似ぬさまにて(私は世間離れた暮らしですので)、何かは(どうにも、その気に為れません)。かうながらこそ朽ちも失せめとなむ思ひはべる(このまま此処で朽ち果てようと存じます)」とのみのたまへば(とだけ仰ると)、

「げに(なるほど)、しかなむ思さるべけれど(尤もな御考えですが)、生ける身を捨て(折角の人生を)、かくむくつけき住まひするたぐひは(こんなに気味悪く暮らす生き方は)はべらずやあらむ(御座らぬではないですか)。

大将殿の造り(大将殿が造り直して)磨きたまはむにこそは(磨き上げなさりでもすれば)、引きかへ(この荒れ屋も今に引き換え)玉の台にも(たまのうてな、美しい御殿にも)なりかへらめとは、頼もしうははべれど(成り変わるだろうとは頼もしく存じますが)、ただ今は(ただ今の所は殿に於かれましては)、*式部卿宮の御女よりほかに(他の王家の御息女である二条院の女主人の他には)、心分けたまふ方も*なかなり(心を分かち合いなさる方もないようです)。 *「式部卿宮の御女(しきぶきやうのみやおんむすめ)」は「紫の上」のことらしいが、そうすると奇怪しい。「式部卿宮」については、注にく紫の上の父宮。「滯標」「絵合」巻では「兵部卿宮」とあり、式部卿宮に転じるのは「少女」巻である。本文上問題のある箇所。>とある。斎院になった朝顔の宮の父宮が「式部卿宮」であり、この時点で其の人物は存命中である。その「式部卿宮」が亡くなるのはこの時点からは4年程後の事らしいので、如何にも誤記に違いない。朝顔の宮はついぞ光君の誘いに応じていないのだから。文脈としては、王家の娘の常陸宮の姫に対して、同じ王家の娘でも光君は別の女に御執心だから貴方に振り向くことは無い、と叔母上は言おうとして態々こういう言い方をしているのだろうから、其処を間違っちゃダメでしょう。誰が何処で間違えたのか、厭な感じで妙に気になる。 *「なかなり」は注にく「なかるなり」の「る」が撥音便化し、さらに無表記の形。「なり」伝聞推定の助動詞。>とある。

昔より好き好きしき御心にて(殿は昔から色事好みの遊び心で)、なほざりに通ひたまひける所々(気ままに御通いなさっていた女の家々は)、皆思し離れに*たなり(みな御見限りになさったようです)。 *「たなり」は注にく「たるなり」の「る」が撥音便化し、さらに無表記化された形。>とある。

まして、かうものはかなきさまにて(こう手入れも無く荒れ放題で)、藪原に過ぐしたまへる人をば(ヤブの中で暮らしていなさる人というものを)、心きよく(迎える準備を心掛けて)我を頼みたまへるありさまと(自分を頼りなさる御様子と思いなさって)尋ねきこえたまふこと(お訪ね申しなさいます事は)、いとかたくなむあるべき(とても難しいだろうと思われます)。

など言ひ知らするを(などと説得するのを)、げにと思すも(そうかもしれないと納得なさるのも)、いと悲しくて、つくづくと泣きたまふ(姫は身に染みて御泣きに為ります)。

[第四段 侍従、叔母に従って離京]

されど、動くべうもあらねば(同道する気配は無いので)、よろづに言ひわづらひ暮らして(いろいろ言葉を尽くし続けた挙句に叔母上は)、

「さらば、侍従をだに(それでは、侍従だけでも)」と、日の暮るるままに急げば(日暮れる早さに急ぎ立てれば)、心あわたたしくて、泣く泣く(侍従は気忙しく、泣く泣く姫に)、

「さらば、まづ今日は(それでは、一先ず今日は是までで御座います)。かう責めたまふ(こう強く急かされましては)*送りばかりにまうではべらむ(私は奥様をお見送りする為だけにでも御供致します)。*「送り」は<見送り>には違いないが、従者なら<主人を面倒を見ながら送り届ける>ことで<後姿を見送る>だけでは済まない。注に<「見送り」は目的地あるいは国境まで送っていくこと。侍従はそのまま筑紫国に住み着いてしまう。>とある。

かの聞こえたまふもことわりなり(奥様が申されたことも理屈が通ります)。また、思しわづらふもさることにはべれば(姫君が思い悩まれるのも当然ですので)、中に見たまふるも心苦しくなむ(中に立って居ります私も居た堪れません)」と、忍びて聞こゆ(小声で申し上げます)。

この人さへうち捨ててむとするを(この人さえも自分を見捨てて行こうとするのを)、恨めしうもあはれにも思せど(恨めしくも悲しくも御思いに為るが)、言ひ止むべき方もなくて(引き止められる手立ても無くて)、いとど音をのみたけきことにて(ますます姫は大声を上げて)ものしたまふ(御泣きに為ります)。

形見に添へたまふべき(姫は侍従に自分の形見として持たせ為さるべき)身馴れ衣も(着慣れた服も)、しほなれたれば(汗染みて渡し為されず)、年経ぬるしるし見せたまふべきものなくて(他に是と言って長年の奉公に対する感謝を表しなさるべきものも無くて)、わが御髪 of 落ちたりけるを取り集めて、*鬘にしたまへるが(付け髪になさっていて)、*九尺余ばかりにて、いときよらなるを(とても美しいものを)、をかしげなる箱に入れて(凝った仕上げの箱に入れて)、昔の*薫衣香のいとかうばしき、一壺具して賜ふ(薫香のとても香り高いものを一壺添えてお与えなさいます)。*「鬘(かづら)」は<髪を結う時の添え髪、付け髪>と古語辞典にあり、「ヅラ」「カツラ」の語源との事。*「尺」は長さの単位で約30cm。「九尺余」は約280cm。*「薫衣香(くのえかう)」は衣類に焚き染める<香木系の練り香>と古語辞典にある。

「絶ゆまじき筋を頼みし玉かづら、思ひのほかにかけ離れぬる (和歌 15-1)

「連るを頼んだ玉かづら、解けた途端にもう届かぬ (意識 15-1-1)

「しっかり付けた玉かづら、まさか外れて落ちるとは (意識 15-1-2)

*「たまかづら」は、「玉葛」なら<つる草の美称>とあり、「玉鬘」なら<多くの玉を糸に通した髪飾り。玉飾り。>また<カツラの美称>とある。この「玉かづら」の言葉に、侍従を例え、形見の鬘を例え、二人の間柄を例えた、理屈と感性の二本立ての歌、かと思う。理性と感情では無い所に、無官王家の一面とも言うべき、どこまでも現実と向き合えない浮世離れた姫の救いがたい悲しみが在るのかも知れない。注には<末摘花から侍従への贈歌。「絶ゆ」「筋」「掛け」は「かづら」の縁語。離別を惜しみ恨むような気持ちの表出。『完訳』は「身分の劣る者からの贈歌が普通。ここは逆」と指摘。>とある。

*故ままの(故乳母の)、のたまひ置きしこともありしかば(言い置きなされた事でも有ったので)、かひなき身なりとも(こんな私でも)、見果ててむとこそ思ひつれ(貴方はずっと側に居るだろうとばかり思っていました)。うち捨てらるるもことわりなれど(貴方の事情も分かるので、見捨てられるのは仕方ないけれど)、誰に見ゆづりてかと(誰に後の世話役を譲ってあるのかと)、

恨めしうなむ(誰も居ないのが恨めしくて) *「まま」は意味からして古語辞典にも「乳母(めのと)」の漢字を充てているが、本来は人類共通の幼児語である。母音だけでは感情音なので意思表示できない。とって子音の多くは舌と歯の摩擦音で発声するので幼児は使えない。そこで喉を緩めたまま唇の開口で発声できる「ま・ば・ぱ」が幼児の初期の意志語となる。この文は姫の口語文だが、それにしても「恨めしうなむ」などと甘ったれた言い方をするほどの侍従との幼友達ぶりで、歌よりよほど可愛らしい。しかし幼い。そして醜い。

とて、いみじう泣いたまふ(取り合えないほどお泣きになる)。この人も、ものも聞こえやらず(侍従も自身の悲しみにとても姫を宥め申すどころではなく、)。

「ままの遺言は、さらにも聞こえさせず(改めて申すまでも無く)、年ごろの忍びがたき世の憂さを過ぐしはべりつるに(長年の耐え難いこのお邸の耐乏生活を見て来て居ながら)、かくおぼえぬ道にいざなはれて(こうして知らない田舎に誘いを受けて)、遙かにまかりあくがるること(遙か遠くに出向いてお別れしようとは)」とて、

「玉かづら絶えてもやまじ行く道の、手向の神もかけて誓はむ (和歌 15-2)

「玉かづらほどけた先の山道の、筋は続くと髪掛けて願う (意識 15-2)

*注にく侍従の玉鬘の贈歌に対する返歌。「絶ゆ」「玉かづら」「掛け」の語句を受けて、「玉かづら」「絶えても止まじ」「掛けて誓はむ」と切り返す。手向の神に誓って決してお見捨て申しません、という気持ち。>とある。この歌は全編複意で、「玉かづら絶えても(華やかな京を離れて、二人を繋いだ糸が切れても)やまじ行く道の(山道を進みながらも、縁までは切れないように)手向の神もかけて(出会った地蔵に手を合わせて、餞別の髪を捧げて一生涯真を尽くすと)誓はむ(祈って誓います)」と読める。さすがに侍従は理性と感情で詠んでいる。二人の違いを歌で表現する作者が凄いのか、読者の思い込みによる解釈に過ぎないのかは定かでは無い。

命こそ知りはべらね(寿命こそは分かりませんが、生涯誓います)」など言ふに(などと言っている)、

「いづら(侍従はどこですか)。暗うなりぬ(もう暗くなりました)」と、つぶやかかれて(奥方に急き立てられて車に乗り込み)、心も空にて引き出づれば(上の空のまま牛車が門から引き出されれば)、かへり見のみせられける(後ろ髪を引かれて振り返ってばかりいたのです)。

年ごろわびつつも(長年侘しい思いをしながらも)行き離れざりつる人の(この邸を去らずに居た侍従が)、かく別れぬることを(こう別れてしまった事を)、いと心細う思すに(姫はとても心細くお思いだというのに)、世に用ゐらるまじき老人さへ(此処を出ても余所では雇ってもらえ無さそうな老女房までも)、

「いでや(いや全く)、ことわりぞ(無理はありません)。いかでか立ち止まりたまはむ(どうして此処に残って居られましようか)。われらも、えこそ(もうとても)念じ果つまじけれ(我慢し切れたものでは有りません)」と、おのが身々に(おのがみみに、それぞれ自身に)つけたるたより

ども思ひ出でて(まつわる縁故を思い出して)、止まるまじう思へるを(出て行こうと考えているのを)、人悪ろく聞きおはず(情けなく聞いていらっしやる)。

[第五段 常陸宮邸の寂寥]

霜月(しもつき、陰暦十一月)ばかりになれば、雪、霰(あられ)がちにて、ほかには消ゆる間もあるを(他の場所なら溶け消える時もあるが)、朝日、夕日を防ぐ(ふせぐ、さえぎる)蓬葎(ヨモギやムグラなどの雑草)の蔭に深く積もりて、*越の白山思ひやらるる雪のうちに(雪を頂く越路の白山が思い出される常陸宮邸の庭先に)、出で入る下人だになくて(出入りする下男の一人も居ないままに)、つれづれと眺めたまふ(姫は茫然と思ひ悩みなさいます)。*「越の白山(こしのしらやま)」は石川と富山の県境である白山連峰。京から見れば福井と岐阜との県境とも言える。さらに富山と長野、新潟の県境には立山連峰がそびえる。斯くして北陸道は山越えの越路である。ところで歌言葉としての「越の白山」は、その厳しい自然を笑い飛ばして乗り<越え>ようと工夫したらしい跡がある。「越」は今でも「御越し」で使うように<来し=来た>の掛言葉。「来しの白」は<白くなったもの>を思わせる。<白くなったもの>といえば「雪」と「白髪」。「雪」は「行き」に掛かるから「来し」との対語で<歳を取って白くなった頭>を歌に詠み込み易い。その<白くなった頭>に苦勞の跡を感じることもあるかもしれないが、むしろ<歳を取った>ことから人生の意味をととも自然の摂理には適わないと笑いながら味わう方がよほど気が利いている。そういう趣きが「越の白山」を織り込んだ歌の底意にありそうだ。注には<「越の白山」は歌枕。『集成』は「消え果つる時しなければ越路なる白山の名は雪にぞありける」(古今集羈旅、四一四、躬恒)。『新大系』では「音に聞く越の白山白雪の降り積もりての事にぞありける」(公任集)を指摘する。>とある。またWebサイト「ミロール倶楽部」の古今集の解説ページからは「白山」を詠んだ他の数首も参照させてもらった。

はかなきことを聞こえ慰め(取り留めも無い話を申し上げて慰め)、*泣きみ笑ひみ(泣いてみたり笑ってみたりして)紛らはしつる(姫の気を紛らわしていた)人さへなくて(侍従までも居なくなつて)、夜も塵がましき御帳のうちも(夜も天蓋に塵も積もりがちな寝台の中で)、かたはらさびしく(側寝の居ない寂しさを)、もの悲しく思さる。*「泣きみ笑ひみ」の接尾語「み」は古語辞典で<動詞の連用形について、重ねて用いられ、動作が交互に反復して行われることを表す>と説明されている用法に該当するのだろう。従って、言い換えの例として<～たり～たり>とも示されている。そこで、より<反復感>を出すために<～みたり～みたり>と言い換えて、「み」が納得できた。

かの殿には(一方の大將殿に於いては)、めづらし人に(愛らしい夫人に)、いとどもの騒がしき御ありさまにて(ますます懸かり切りのご様子で)、いとやむごとなく(特に止むに止まれぬほどには)思されぬ所々には(御思いでない女の家々には)、わざとも(何も態々とは)え訪れたまはず(さっぱりお訪ねになりません)。

まして(ましてこの姫の事となると)、「その人はまだ世にやおはすらむ(その人はまだ生きておいでだろうか)」とばかり思し出づる折もあれど(とだけは思い出しなされる時もあるが)、尋ねたまふべき御心ざしも(お訪ねなさろうかという御心向きも)急がであり経るに(急ぐ事は無いという内に)、*年変はりぬ(年も明けました)。*注に<帰京の翌年、源氏二十九歳の年となる。>とある。